

ささえあう

2011年
5月12日
第14号

事務局 大分市大字森679-6 リフォーム夢舎内 TEL・FAX097-527-5443

大分精神障害者就労推進ネットワークの取り組みも間もなく6年目に入ります。

心の病を持つ多くの人が「働きたい」と願っているが、受け入れる場が少ない現実を何とかしたいという、切実な思いからの出発でしたが、

そのなかで、私たちは地域連携が効果的かつ不可欠であることを実感しました。

6月11日に別府大学で開催する第6回総会では、地域における様々な連携を拡大していくための新たな方針を作り上げていきたいと考え

第6回総会を6月11日に開催します。 「地域連携」を広げるために

竹田と国東の取り組みも報告

当事者や家族、支援者の思いに、公的な機関や行政の協力もいただきながら、一步一步、理解と実践の輪を広げていくことができました。

昨年度は、企業向けマニュアル「人も企業の生き生きと」の作成、九州ブロック大分セミナー(別府市)・国東セミナー・竹田セミナーの開催支援等、積極的な取り組みを行ってきました。

ています。そのためには、様々な立場の方々にご参加いただき、話し合い、力を合わせていくことが不可欠です。

心の病を持つ人とその家族が安心して暮らせる地域をつくっていくために、ぜひとも皆様のお力をお貸しいただければと願っています。

総会への皆様のご参加をお待ちしています。

- 日程 6月11日(土)13時30分～16時
- 会場 別府大学 メディア教育センター 別府市北石垣82
- 内容
 - ①第6回定期総会
 - ②総会記念行事「地域からの報告」 — 報告とビデオ上映
 - ・竹田フォーラム — 地域連携と3年間の成果
三城 大介・別府大学文学部人間関係学科准教授
 - ・国東フォーラム — つながった思いと広がる支援
小川 浩・国東市福祉事務所福祉課障害福祉班班長
川野 正・NPO法人輝くピアホーム理事長

働く精神障害者からのメッセージ発信事業「九州ブロック大分セミナー」

障がい者雇用で生き生きした職場を

5年ぶりの厚労省委託事業で成果と課題を確認

2月26日、別府市の亀井のホテルで「働く精神障害者からのメッセージ発信事業九州ブロック大分セミナー」（厚労省委託事業）を開催しました。テーマは「人も企業も生き生きと」。大分県を中心に九州各地から250人が参加し、様々な成果がありました。

代表あいさつ・基調報告

「働く夢が現実に」

実行委員会を代表して藤波代表があいさつ。「5年前にこのセミナーを開いたときには、精神障がい者が働くことはまだ“夢”だったが、今はそれが現実になっている。まだ課題は多いが、このような取り組みを重ねていくなかで一つひとつ克服していきたい」と述べるとともに、1月に逝去された北山守典氏の冥福を祈りました。

基調報告では大阪精神障害者就労支援ネットワーク JSN の金塚たかし所長が、「精神障がいを持ちながらも働きたい人は多いが、実際に企業で働いている人は少ない。就労を阻むのは、①「働けない」という誤った常識②再発への不安③精神障がい者への偏見。しかし、地域での総合的なネットワーク支援があれば働ける」と話しました。

行政報告

「病気の開示も必要」

行政報告では厚労省労働省高齢・障害者雇用対策部地域就労支援室の中地美友室長補佐が、就労の現状と支援制度や事業について説明し、「精神障がい者の求職者は増え、雇用率は上昇しており、今後ますます重要になる。事業所の支援を受けるためには病気の開示が必要」などと話しました。



経験交流会（実践報告）

「支援制度活用すべき」

経験交流会（実践報告）は、大分障害者職業センターの村上寿一主任障害者職業カウンセラーが司会をしました。

大場製作所（宮城県）の大場俊孝社長は、「社員65名中12名が障がい者（うち精神障がい11名）。皆フルタイムで残業もする。時間をかけて正式雇用すれば失敗はない。“職親”やトライアル雇用などの支援制度も活用すべきだ。支援機関と企業のマッチングも重要。関係者によるケア会議が一番大事だ」と強く呼びかけました。

「どんな相談にも乗ってもらえる」

働く当事者として大場富美子社員は「作業所から紹介され就職した。病気を隠すことなく堂々と通院でき、どんなことでも相談に乗ってくれる体制がある。今は自立した生活を送れている」と話しました。

「『普通』を基本に」

精神障がい者を雇用しているホンダ太陽株式会社の樋口克己取締役管理本部長は、「企業はいろんな人がいてこそ健全。障がい者は特別な

人という考えをやめて、『普通』で接することが基本だ」と指摘しました。

「社外機関との連携も重視」

L.L.C.ハートブリッジの衛藤淳之介・企業内支援者は、「看護師・保健師・精神保健福祉士・社会福祉士などが連携して“個別就労支援”を行っているが、他機関との連携も重視している。見学—実習—研修を経て一般就労する人も出てきており、必要に応じて継続支援を行っている」と話しました。

「自信がついて楽しみも」

働く当事者として姫野さんは、「最初は不安でしゃべれなかったが、仕事ができる自信がつくと、コミュニケーションがとれるようになった。介護の仕事に向いているようで、楽しみや成長を感じている」と話しました。また、「心の病気は誰でもなり得るので、皆さんもストレスを発散して病気にならないようにしてください」と呼びかけると、会場はあたたかい空気に包まれました。

“企業向けマニュアル”紹介

大分精神障害者就労推進ネットワークの雇用実践マニュアルについては編集長を担当した大分障害者職業センターの青柳智夫所長（当時）が報告しました。

このマニュアルは、県内で実際に支援を行っている人たちがつくったもので、相談先や利用できる制度などを掲載しており、受け入れの際の研修や現場で困ったときなどにも活用するよう呼びかけました。

シンポジウム「人も企業も生き生きと」

企業にも様々なプラス

シンポジウム「人も企業も生き生きと」は、三城大介・別府大学文学部人間関係学科准教授がコーディネーターになり、「障がい者雇用をきっかけにして 人も企業も生き生きとした職場づくりを始めるために」を目標に掲げて行われました。

「心のサポート重要」

フライハイムの白石一徳さん（精神保健福祉

士）は、「休まず毎日通うことが自信をつけるために大切。最初は希望を持っていても、だんだん不安になることがあり、心のサポートも重要」。

「企業に地域貢献の思い」

大分県溪泉寮の系永倫子・副寮長は「働きたいという本人の思いを尊重している。受け入れ企業には『地域への貢献』という気持ちがある」と当事者や企業の可能性を話しました。

「赤字からトントんに」

ホンダ太陽株式会社の都築憲幸・総務課長は「精神障がい者のラインは、赤字からトントンのところまで行った。採算はとれるようになって考えている」と企業経営の立場から話しました。

「家族の関わり重要」

ナザレトの家の川上康弘・業務生活支援部長は「家族の確実な関わりが重要」と支援の経験を通して指摘しました。

コメンテーターの金塚さんは、「必ず失敗はある。そこがチャンスになる。『ダメ』は企業に言ってもらい、そこから信頼関係を本物にしていくことが重要」と話しました。

三城准教授は「今日は、実際に受け入れて雇用している企業の話を知ることができた。実際に連携しながら取り組んで不安を克服していくことで、さらに可能性も広がってくる」とまとめました。



具体的な成果が目に見えるとともに、現場での課題も明らかになったセミナーでした。

「精神障がいがある人とみんなのための国東フォーラム」

「知ってほしい」—願いが伝わる

230人、地域のあり方を一緒に考える

2月4日、国東市の武蔵健康福祉センターで「精神障がいがある人とみんなのための国東フォーラム—理解があれば生きられる 支援があれば働ける」が開かれました。約230人が参加、「精神障がいについて知ってほしい」「地域で受け入れてもらいたい」という思いがこもった行事でした。

「一人悩み苦しむ現実」

「心に病がある人や家族の多くは、一人悩み苦しんでいるのが現実。ふるさとで暮らし、働けるようになればと願っている」と主催者を代表して福田吉秀・国東精神障がい者福祉会会長があいさつ。

来賓の野田市長（当時）は「課題である公共交通費の軽減や場の確保に取り組みたい」とあいさつ。また大神東部保健所長は「今でも長期入院や社会的入院が多い。地域に受け皿がないことが大きな理由だ。心のバリアを取り除き、地域の皆さんの理解を広げていくことが重要だと考えている」と話しました

「このまま老いていくのは…」

フォーラム開催に至る経過の説明では、家族や福祉・保健・医療関係者、自治会、行政なども参加した実行委員会の中で、「精神障がい者の緊急時の受け入れ体制がなくて、家族も警察も消防も困っている」という意見や「支援を受けながら地域で暮らしているが、このまま老いていくのは、見ている方も忍びない」という意見、また「まだまだ支援が届かず地域でひっそり暮らしている人もいる」など様々な意見が出され、今回のフォーラムは、「市民のみなさんに国東市の精神障がい者の現状や障がい者の生活を知って、障がいについて理解してもらいた



い、そして支援があれば働けるということを知ってもらいたいという思いが込められたもの」になったことが報告されました。

ケーブルテレビ制作“ビデオ”も

ビデオ上映は、国東市ケーブルテレビと実行委員会が共同制作した「理解があれば生きられる 支援があれば働ける」。国東市内の4つの精神障がい者支援事業所を紹介し、仕事の様子や当事者の思い、支援する人たちの声を生き生きと伝えてくれました。「障がいを隠して生きてきたが、みんなに知ってもらおう事で楽になった」と話す明るい表情が地域の理解の大切さを物語っていました。

当事者「仲間と力を合わせて仕事」

続いて「事例発表」。輝くピアホームで仕事をしながらグループホームで暮らす芳本さんは「二十歳で入院し、その後入退院を繰り返した。その間に両親も亡くなり、帰る家もなくなった。そんな時、病院の掲示板で“グループホーム山ちゃん”の紹介を見たけど『行かんぞ』と思った。ところが病院の精神保健福祉士から見学に行こうと誘われた。『見学なら』と訪ねることになり、体験入所をし、結局入所することにな

った。今は、閉ざされた病院から開かれた楽しい環境にという配慮だったと感じている。カラオケなど楽しい時間を過ごしており、入って良かったと満足している。作業所に通所し、企業に出向いてロープ編みをしているが、命に関わる仕事なのでしっかり心を込めて働いている。一昨年から椎茸栽培も始まり、仲間と力を合わせて仕事ができることに感謝している」と話しました。

家族「子ども見るため長生きを」

家族として後藤さんは、「私は75歳で、病気の娘と孫と一緒に暮らしている。孫が小一の時、娘が学校に行かせず強制入院させたこともある。今は子育てに一生懸命で、『子どもに勝る宝なし』という言葉の思い浮かべる。あと20年位は子どもの面倒を見るために長生きさせてもらわなければと思っている。治療法の確立を願っている」と話しました。

雇用主「普通につきあう」

雇用主、職親の立場から鈴鳴荘施設長の高橋とし子さんが、「老人ホームで、配食、環境整備、畑の管理などの仕事を、自分の計画に沿って働いてもらっている。高齢の利用者と将棋をしたりすることもある。働き続けられると感じている。病気を知っても、普通につきあうことが大切だと思う」と話しました。

「無理解・差別まだ多い」

「家族からのメッセージ」では、国東精神障がい者福祉会の友成副会長が、まだ地域の無理解や差別が多いこと、親も当事者もつらい思いを持ちながら暮らしていることを多くの家族の声を朗読することで伝えました。

三角ベース音楽クラブのメンバー9名によるハンドベル演奏は、美しい音が会場を和らげてくれました。

パネルディスカッション

「理解があれば生きられる 支援があれば働ける」

「パネルディスカッション」は、「理解があれば生きられる 支援があれば働ける」をテーマに思いを語り会いました。コーディネーターは国東市市民健康課保健推進班の郷司典子保健師。アドバイザーは三城大介・別府大学文学部人間関係学科准教授が勤めました。

「抱え込まず、相談して」

国東精神障がい者福祉会会長の福田吉秀さんは、「家族だけで悩まないで相談してほしい。ストレス社会では誰でもかかる病気で、遺伝や子育てが原因ではなく、隠す病気ではない。3障害のなかでは対応が一番遅れており、地域で受診できることや緊急対策、公共交通の割引など課題も多い」と話しました。

「知らん顔せんで声かけて」

最廣寺住職の北條美津子さんは、「お参りに行った時、両親を亡くして体調を崩した人がいたので声をかけた。お寺に来てくれたので、支援は難しいが、お茶を飲み話を聞いた。お寺に

は“駆け込み寺”という役割もある。地域には引きこもりの人や『自殺したい』という人がいる。知らん顔をせんで声をかけてほしい。みんな一緒に暮らせて『ありがとう』と言えるようになりたい」と話しました。

「いろんな支援あること知って」

(社福)共生荘理事長(三角ベース)の荘司壽子さんは、「相談支援の仕事をしている。地域に開放し、交流する取り組みを続けてきた。一人で、また家族だけで悩んでいる人がたくさん



いる。いろんな支援があることを知っていただきたい。当事者の揺れに寄り添っていききたい」と話しました。

「訪問看護で支援。課題も」

杵築オレンジ病院訪問看護責任者の中磨美保子さんは、「訪問看護をすることで1日でも長く在宅で暮らせるように取り組んでいる。再入院を防げることもある。長期入院するほど退院意欲はなくなる。受け入れ施設がたくさんできればもっと退院できるようになる。また、夜間の電話対応ではどうしようもないジレンマを感じることもある。救急医療も課題だと思う」と話しました。

「社会的に支えることが重要」

国東市福祉事務所福祉対策課障がい福祉班の小川浩美さんは、「実行委員会で話を聞くなかで、具体的な課題が見えてきた。そのなかで、①緊急受け入れ・見守り・家族支援のためのサロンのような場所の確保②移動支援、公共交通料金の負担軽減③就労支援に力を入れたいと考えている。高齢者福祉では、介護保険の導入に最初は抵抗があった。しかし今は、家族から社会が支援することが当たり前になった。障がい福祉も家族だけに頼らず、社会的に支えることが必要だ」と話しました。

「会場からの発言」

「生きてほしい！」

「親は自分を責める。『病気なんだよ』と言われ救われた。家族会に入ることで解決に近づ

けると思う。今施設では15人が働き、グループホームで暮らしている人もいる。しかし結婚できない、子どもも持てないのが現状。狭い世界で生きている。それでいいのかと自問自答している。もっといろんな体験をしてほしい。生きてほしいと思う」（支援施設関係者）。

「横のつながりを広げたい」

「地域の中核病院で週2回しか精神科外来がない。背景に医師不足がある。夜間、急に悪くなった場合、本人も家族も疲れ果てているとき、どうすればいいのかと感じる。横の連携システムや公立精神科病院が必要と感じる。このフォーラムをきっかけに横のつながりが広がり地域の理解が深まればと思う」（病院関係者）

「顔が見えるネットワークを」

三城准教授は、「まず知ってもらうこと。そして、顔が見えるネットワークをつくること。今日はいいいきかけになった」と評価しました。

「あたたかい目で接して」

最後に川野正副実行委員長が、「初めて知った方はかなり驚かれる内容だったのではないかと思います。しかし、精神の病気も他の病気と同じです。これをきっかけに関心を持っていただき、周囲にいたらあたたかい目で接していただきたい。今後も何らかの形で続けていきたいと思しますので、次回はじいちゃんばあちゃんや、近所のまわりの人に声をかけて参加してください。今日の実は大きいものがあつたと確信しています」と閉会のことばを述べました。

社会福祉法人
そよかぜ



ふれあいステーション ひので

就労継続支援B型・就労移行支援事業所

“心の居場所”・“自分の仕事”を見つけるために



- 自分の心の収まり場を見つけることから始めます ●「何が自分のする仕事なのか」を見つけたとき、喜びを持って毎日暮らしていけます ●自分の力で安定したものを見つけることによって一般社会に場所を変えても生きていける。そう思いながら支援しています。

「人とのつながりとか人を大事にする気持ちがわいてくるところです」（利用者の言葉）

速見郡日出町字仁王山3531-24 TEL 0977-73-1326 FAX 0977-76-7555 メールhinode@po.d-b.ne.jp

「精神障がい者の地域生活と就労を考える竹田フォーラム」 民生委員や商店街も参加—「地域連携」が形に 3年間の成果を確認

「第3回 精神障がい者の地域生活と就労を考える竹田フォーラム」が3月18日、竹田市総合社会福祉センターで開催されました。市長をはじめ市議会議員や民生委員なども多数参加し、参加者はこれまでで最も多い約150人。「心の病がある人が暮らしやすい地域は誰もが暮らしやすい地域」と熱心な意見交換が行われました。

大震災犠牲者に黙祷

東北・関東地方が大震災に見舞われている時期だけに、被災者を思いやる言葉が多く聞かれ、亡くなった方々に黙祷を捧げました。

来賓としてあいさつに立った首藤市長は、「障がい者の問題でも、私たちに何ができるかを考えていきたい。今日のフォーラムで気づきの世界が生み出されることを期待したい」と呼びかけました。

基調講演

「地域知る自治委員・民生委員と 医療・福祉・行政の連携を」

基調講演に立った別府大学文学部人間関係学科の三城大介准教授は「知らないものは怖い。それは排除につながる。心の病がどんなものか知っていれば包み込んで適切な対応ができる。竹田市は地域で人々を包み込んできたところで可能性がある地域だ。自分たちの地域をよく知っている自治委員、民生委員の皆さんと医療・福祉・行政などが連携していけばよりよい地域にしていける」と、正しい知識を持つことと地域の連携を呼びかけました。

報告体験発表

当事者「まわりに知ってもら うことで気持ちが軽く」

続いて報告体験発表「生活につながる医療と福祉」が行われ、ビデオ上映、「医療の現状」



の報告、体験発表が行われました。

ケーブルテレビの協力で作られたビデオ「地域で暮らしたい」では、「まわりに知ってもらうことで気持ちが軽くなった」という当事者、「不安があったが受け入れることで普通に話ができることがわかった」という職場の同僚、「働くことで元気になれる」という支援者の声などが聞かれました。

医療「地域ケアに転換中」

「医療の現状」については、加藤病院の河野・病棟看護課長が「今はクスリが良くなるとともに多角的なアプローチによる治療が進み、入院中心から地域ケアに転換し始めているが、地域との連携が不十分だった。このような様々な立場の人が連携を取り合って考える場が増えればと願っている」と話しました。

支援者「知って誤解が解ける」

体験発表では、障がい者サポートセンターやまなみの貞永さんが「やまなみで働き始めるまで、精神障がいについて誤解していた。利用者になんかどう接すればいいか、また受け入れてもらえるかと心配した。朝から元気で暑くても寒くてもみんなで作業する。内職、畑屋や田んぼの仕事、草むしりなどする姿を見ていると、『働きたい』という気持ちを感じる。あたりまえの生

活があった。偏見と無知の怖さを教えられた。最近では商店街との交流も始まっており、弱い人にやさしい街はすべての人にやさしい街だと感じている」と話しました。

シンポジウム

「福祉をつなぐ 地域をつなぐ」

シンポジウムは「福祉をつなぐ 地域をつなぐ」をテーマに医療・自治会・商店街・行政関係者が意見交換を行いました。

相談支援者「まだまだ偏見が」

シンポジストの吉田さん(竹田市の相談支援事業所)は「巡回相談やまちなか相談、地域での“いなばよろうち座”等の取り組みを始め、相談は増えてきている。しかしまだ地域の受け入れには困難を感じる人が多い。まず周囲の偏見。『どう対応すれば』『こわい』という声を今も聞くことがある。次に住まいの確保の難しさ。最近も病名を言って断られたことがあった。また保証人も見つからない。また経済面も課題だ。仕事もできない、年金も納められないからもらえない。地域で連携して考えていけたらと思う」と話しました。

自治会長「正しく知れば」

自治会長でボランティア活動も行う吉弘さんは「地域の出来事を共有すること、地域の障がい者や高齢者を知ること、一緒にやることを大切にしてきた。偏見に気づき、正しく知れば地域でも交流できる。何事も正しく知ろう」と話しました。

商店街「交流進め、やさしい街に」

商店街振興組合代表理事の都築さんは「楽市楽座には福祉事業所に参加してもらっている。去年は商店街ウォークラリーを行い、精神障がいの人たちと交流した。事故やトラブルを心配する人もいたが、全然問題もなくて喜んでもら



えた。空き店舗への出店を支援したい。人にやさしい商店街をつくりたい」と話しました。

行政「地域との連携で成果」

竹田市福祉事務所保健師の渡部さんは「精神保健福祉を担当して個別支援などに取り組んだが、課題の大きさと福祉事務所だけの対応に困難を感じた。その時期に、フォーラムの実行委員会で関係機関の人たちと連携ができ、町中や地域での相談事業、民生委員の研修会、地域の交流会などの取り組みを広げられた。そして、関係者の話し合いや地域の声を受けながら改善して行くことができた。フォーラムに自治委員や民生委員の参加が増え、福祉事務所への相談も増えている」と話しました。

会場からも、「議会ではこれまで高齢者や子育てに力を入れてきたが、障がいの問題にも力を入れなければと感じた」(議員)などの声が出されました。

「福祉事務所全体で取り組む」

閉会のあいさつに立った後藤・竹田市福祉事務所長は「福祉事務所全体が精神障がいを持っている方を理解して取り組んでいくことが重要だと感じている。行政、医療、福祉や保健など関係者が連携して取り組んでいきたい」と話しました。

編集後記 5年目のネットワークも元気でした。ボランティア精神で、精神障がい者と家族を取り巻く課題に、一つひとつ挑戦しています。もちろんすぐに解決することはなく、試行錯誤の連続。しかし、地区フォーラムは、地域でいろんな立場の人たちが連携することで、必ず光が見え始めることを教えてくれました。大震災に直面して、「ささえあう」大切さを実感する日々です。(〇)